

空間デザインにおける美の基準の創出に関する基礎的研究：美しいインテリア空間づくりのチェックリストの創出のために

高橋，浩伸

<https://hdl.handle.net/2324/459197>

出版情報：九州大学，2005，博士（工学），課程博士
バージョン：
権利関係：

第6章 総括

6.1	本研究のまとめ	
6.2	今後の課題	151
		152
	注記	
	引用文献・参考文献	153
	謝辞	155
		158

6.1 本研究のまとめ

これまで、美に関して論拠ある自然科学的なアプローチは、ほとんどなされていなかった。これは何度も言うようであるが、美が思想や哲学の範疇で扱われ、人の心の問題であるとされてきたからである。しかし、19世紀以降、心理学的な実験方法を取り入れ、心理学的な実証をもとに自然科学的な因果的法則を示せるようになってようやく、自然科学的な範疇で扱われるようになった。しかし今だに美に関しては、造形的、形態的な研究が多く、視覚や人間の認知に関する研究がほとんどであり、なぜそれを美しいと感じるのか、どのようなものを美しいと評価するのかという人間側の心理的評価のシステム等は、いまだ究明されていない。

そこで本研究では、インテリア空間に特定し、心理学的手法としてのSD法（SD法→因子分析）や評価グリッド法を用いて、日本人の美の概念の階層構造を究明し、さらに人々の美的価値観を抽出することで、どのようなインテリア空間を人々は美しいと評価するかということを明らかにし、そこでさらに抽出された美的価値観をもとに、美しいインテリア空間を創造しようとする場合の、最低基準としての「美の基準」を創造し、これらを美のチェックリストとし、今後建築家やデザイナーが、美しい空間を創造する場合の設計支援となるような資料を提案した。

この美のチェックリストにおける、27の項目を設計・デザインを行う前あるいは、その途中で検討することで、これまでデザイナーらの自己満足あるいは独りよがりや批判されてきたような、クライアントやユーザーの賛同を得られなかった建物等を減らし、美しいものづくりに関するデザインコードとなるものを提案できたものと考えている。

6.2 今後の課題

神奈川県真鶴町において、まちづくり条例による「美の基準」によって計画・建設された建物が真鶴町にある「コミュニティー真鶴」である。

この建物は平成六年四月に建てられ、現在11年を経ているが、建物の随所に設計者の心配りが見られ、計画の困難さが窺い知れる。しかし、この建物が「美しい」という問いかけには、人々の評価は分かれるであろう。

真鶴町の「美の基準」は純粹に「美」を扱ったものではない。むしろ「美」よりも「なつかしさ」や「真鶴らしさ」を求めたものである。これは、現地調査の折に真鶴町役場の都市計画課でもはっきり示していることであるが、この基準をすべてクリアーすることで、美しい景観が保てるとは真鶴町自体考えていない。あくまでこれは現在の真鶴町を乱開発から守る手段として考えられた条例である。ただ条例制定当時、「美の基準」という言葉が先行し、日本中に驚きの目を持って紹介されたのである。したがって、真鶴町の「美の基準」に準じて計画された建物であっても、必ずしも「美しい」建物であるとは言えない。

しかし、本研究で提案した「美の基準」は、印象評価実験によって得られた評価項目（美的価値観）をもとに作成しているため、純粹に「美」に関する基準と言える。

ただここで、「美」に関して考えた場合、美しいものをつくるためには、創造性や新奇性など、一般化できない部分が多い。それをわかった上で本研究において最低基準を求めたのは、「美しいもの」を創造するためではなく、「美しくないもの」を減らそうと考えたからである。そのためには今回の研究とあわせて、人々がどのようなインテリア空間を「美しくない＝醜い」と評価するかという非美的価値観というものを抽出し、この本研究における「美の基準」を「美」と「醜」の両方から補完する必要性を感じている。

今後はこの「醜」の面からこの「美の基準」を充実させることで、より内容の伴った「美の基準」が完成することを今後の目標とする。

注記

第1章

注1：セロフォン (Xeophon B. C. ca.430-ca. 350) 『一万人の退却』で有名な軍人で種々の著作がある。

注2：ヴィトルヴィウスの『建築十書』の後、建築家が規範とするような建築書は、中世では見あたらず、近世になってようやく、アルベルティ (Leon Battista Alberti, 1404-1472) の『建築書』が見いだせる。

またその後発表された、アントニオ・フィラレーテ (Antonio Averlino (Filarete), 1400-1469 頃) や、フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ (Francesco di Giorgio Martini, 1439-1501) 等の建築書があるが、16世紀後期のセバスティアノー・セルリオ (Sebastiano Serlio, 1475-1554) の『建築書 (L' Architettura)』によって、建築美の究極の姿は、オーダーにあるとされ、これは無批判に受け入れられ、建築論は、いかなる比例関係が最も美しいのかという点に絞られていく。

17世紀になって、クロード・ペロー (Claude Perrault, 1613-1688) は、古代からルネサンスにいたるオーダーの比例に全く統一性がないことを指摘し、オーダーに内在する絶対的な美というものに対して疑問を呈したが、比例と美の関係に対する議論はしばらくのあいだ続けられた。

しかし、18世紀には、オーダーはもはや単なる装飾とみなされるようになり、その象徴性は失われ、古典主義建築を表すだけの記号とされた。このほかにも、アンドレア・パッラーディオ (Andrea Palladio, 1508-1580) の『建築四書』やジョン・ラスキン (John Ruskin 1819-1900) の『建築の七燈』等が見いだせる。

パッラーディオの『建築四書』においては彼自身の建築理論や建築デザインが、ウィトルヴィウスやアルベルティを通じてギリシア・ローマの古典様式に由来すると述べ、美しい建築は古典によらねばならないと述べている。

またジョン・ラスキンの『建築の七燈』は、これまでの建築書と違い、道徳、倫理的視点からの建築論であり、これまでの建築書と一線を画す。

注3：HOLGER HOGE は、EMPIRICAL STUDIES OF THE ARTS, Vol. 15 (2) 223-255, 1997 において発表した論文においてフェヒナー (Fechner) の行った実験に対して、異なった結果を示した例を挙げ (Benjafield, 1976; Boselie, 1992; Davis, 1933; Godkewitsch, 1974; Haines & Davies, 1904; Lalo, 1908; Piehl, 1976; Plug, 1980; Svensson, 1977)、又自らも実験を行い黄金分割比が神話であると結論づけている。そして黄金分割による美的な心地よさは、むしろ未知の要素による効果が大きいとしている。

注4：ワトソン (John B. Watson, 1878-1958) は、S-Rアプローチを提唱し、環境そのものが人間の行動に直接影響を与え、また、行動は学習されるもの、経験による習慣的なもので、習慣さえあれば行動が生じるのだとし、環境が行動を作り出すとした。しかしこのワトソンの極端な「環境主義」は、人間側の要因を無視していることからその後多くの批判を浴びる。参考文献：(社)日本建築学会：「よりよい環境創造のための環境心理調査手法入門」, 技報堂出版(株), P9, 2000. 5)

第2章

注1：アヴェロンの野生児：幼年期を人の手に寄らず狼に育てられ、アヴェロンの森にて、医師イタールによって発見された野生児の記録である。1800年、フランスのアヴェロンの森で発見された当時、11~12歳と推定された少年はヴィクトールと名づけられ、イタールによる5年間の教育でいくつかの人間らしい習慣を身につけることでは

きたらしい。しかし、ことばを習得することはできず、推定40歳くらいで死亡するまで社会化されることはなかったという。著者のイタールはロックなどの影響を受け白紙説の立場をとっていたようで、野生児に足りなかったのは人間としての環境や経験であると主張している。

注2：オオカミ少女：1920年にインドのミドナプールで、オオカミの巣穴から二人の少女が救出された。救出された当時は、恐ろしい形相をし、まるでオオカミみたいな抵抗をしたのち捕えられた。ひとは2歳、もうひとは8歳（いずれも推定年齢）で、それぞれアマラ（A-mala「明るい黄色の花」の意）とカマラ（Kamala「桃色の蓮の花」の意）と名付けられたがアマラは1年も経たないうちに死亡した。カマラは8年間生き続け、医師の証明書によると、1929年11月4日、尿毒症のため死亡した。彼女たちは、顔形は人間だったが、行動は全くオオカミと同じで、日中は部屋の隅で眠っており、夜になるとあたりをうろつき回り、夜中には遠吠えまでしていたという。カマラは、3年ほどして、1人でやっと立って歩けるようになったが、急ぐときは4本足走り、この習性は死ぬまで直らなかったという。

注3：神宮英夫は、刺激－印象－反応関係において、人や事柄や物に対して形成された全体的印象は、その刺激としての対象が持っている多くの物理的属性に対する感覚によってもたらされるとした上で、複数の感覚の結果から全体的印象が形成されることを「印象化」と呼び、この「印象化」によってその対象に対する印象を意識し、反応がもたらされるが、その反応を「反応化」のはたらきと呼ぶことにしていると述べている。（参考文献：大澤光：「印象の工学」とはなにか、丸善プラネット(株)、P83, 2000. 1)

第3章

注1：フモール (humor)：おかしみ、ユーモア（を解すること）。

注2：和服や風呂敷、草履等に見られるようなおおまかなサイズによる、あいまいな文化。参考文献：古庄敏行：日本はなぜあいまい文化なのか、廣済堂書店、1997

注3：西欧の科学中心の思想に対し日本（東洋）思想はあいまいな思想と呼ばれる。参考文献：藤井康男：21世紀の曖昧論、佼成出版社、1997

注4：「本朝文粹」（藤原明衡編）に「況在二曖昧之中一、思二瑩弘之道」というのがある。参考文献：日本国語大辞典1、小学館日本大辞典刊行会、1986、P47

注5：桑山玉州「絵事鄙言」1799：参考文献、井上充夫：日本建築の空間、鹿島出版会、1995

第4章

注1：認知構造：「窓が大きい－小さい」「室内が明るい－暗い」等、人間が感覚器を通じて得た情報を意味のある世界として理解する際の認知の単位（認知項目）と、これらの間に存在する因果関係が構成する構造。認知構造は経験を通じて後天的に形成されるとされ、本来個人に固有のものである。

注2：評価構造：「良い－悪い」等、総合的評価判断に寄与している理解の単位（＝評価項目）と、これらの間に存在する因果関係が構成する仮想的な構造をいう。

引用文献・参考文献

第1章

- 1) 井上充夫：建築美論の歩み，鹿島出版会，P35，1996.5
- 2) 後藤連平：「ピーター・マークリーの建築に関する研究」、京都工芸繊維大学 修士論文，平成15年度
- 3) 竹内敏雄：美学総論、(株)弘文堂、P24、1979.5
- 4) (社)日本建築学会：よりよい環境創造のための環境心理調査手法入門，技報堂出版(株)，P2，2000.5
- 5) 讃井純一郎，乾正雄：個人差及び階層性を考慮した住環境評価構造のモデル化，日本建築学会計画系論文報告集，P54-60，第374号，1987.4
- 6) 槇究，乾正雄，中村芳樹：評価項目が街路景観評価に及ぼす影響，日本建築学会計画系論文報告集，P27-33，第468号，1995.2
- 7) 宇治川 正人，丸山玄，讃井 純一郎：電子メールを用いた評価グリッド法の開発，日本建築学会計画系論文集，P.75-80，NO.518，1999.4
- 8) 合原一幸：脳はここまで解明された，(株)ウェッジ，P22，2004.3
- 9) 佐野潤一：ミス・ファン・デル・ローエによるレイク・ショア・ドライブ・アパートメントのファサードのプロポーションにおけるダブルスクエアと黄金比，日本建築学会計画系論文報告集，P319-324，第537号，2000.11
- 10) 芦原義信：街並みの美学，岩波書店，1993.3
- 11) 穂山憲，和田卓，乾正雄，中村芳樹：オフィス環境評価に影響する对人的要因，日本建築学会計画系論文集，P.65-73，NO.474，1995.8
- 12) 槇究，乾正雄，中村芳樹：街路景観評価の個人差について，日本建築学会計画系論文集，P55-62，第486号，1996.5

第2章

- 1) 木幡順三：美と芸術の論理，勁草書房，P17，P12，2001.3
- 2) インゴ・レンツェー，ハーバート・ヘルツバーガー，デヴィッド・エプスタイン編：野口薫，芋阪直行監訳：美を脳から考える，新曜社，序論 P-iv 2000.6
- 3) 梅本堯夫，大山正：心理学史への招待—現代心理学の背景，(株)サイエンス社，P3，P161，2004.1
- 4) 辻三郎：感性の科学，(株)サイエンス社，P47，2002.4
- 5) 大澤光：「印象の工学」とはなにか，丸善プラネット(株)，P83，2000.1
- 6) 菅俊夫：環境心理の諸相，八千代出版(株)，P20，2000.5

第3章

- 1) インゴ・レンツェー，ハーバート・ヘルツバーガー，デヴィッド・エプスタイン（野口薫，芋阪直行訳）：美を脳から考える，(株)新曜社，序文v，2000.6
- 2) 高階秀爾：日本近代の美意識，青土社，P204-213，1993

- 3) 竹内敏雄：美学総論、(憐弘文堂、P24、1979.5)
- 4) ドナルド・キーン (金関寿夫訳)：日本人の美意識、中公文庫、P12、1999
- 5) フルノ・タクト (森携郎訳)：日本文化私論、講談社学術文庫、P64、1999
- 6) 新村出編：広辞苑第5版、岩波書店、1999
- 7) 秋山虔編：王朝語辞典、東京大学出版会、2000
- 8) 中村幸彦他編：角川古語大辞典第1巻、角川書店、1982
- 9) 蒲田正、米山寅太郎編：大漢語林、大修館書店、1992
- 10) 前田勇：江戸語大辞典、講談社、1974
- 11) 大久保忠国、木下和子編：江戸語辞典、平文社、1991
- 12) 福沢諭吉「文明論之概略」：日本国語大辞典1、小学館日本大辞典刊行会、1986
- 13) サミュエル・スマイルズ (中村正直訳)「西国立国志」：日本国語大辞典1、小学館日本大辞典刊行会、1986
- 14) 渡邊 敏郎編：新和英大辞典第5版、(憐研究社、1974)
- 15) 三省堂編修所編：テイル・コンサイス英辞典第4版、三省堂、1991
- 16) 市川伸一・伊藤裕司編：認知心理学を知る、ブレン出版、1991
- 17) 吉岡徹：生活造形の美意識、家政教育社、P249、1998
- 18) 長尾剛：日本が解る思想入門、新潮文庫、P123、2000.10
- 19) 世阿弥 (上豊一郎他校訂)：風姿花伝、岩波文庫、P103、1993
- 20) 久鬼周造：いきの構造、岩波文庫、P72、2001
- 21) 井上充夫：日本建築の空間、鹿島出版会、P225、1995
- 22) 伊藤ていじ：日本デザイン論、鹿島出版会、P74、1999
- 23) 東孝光：日本人の建築空間、彰国社、P74、1990
- 24) 神代雄一郎：間(ま)・日本建築の意匠、鹿島出版会、P78、1999
- 25) 岡倉覚三 (ソントノ不破直子訳)：Kakuzo Okakura. The Holy Scripture of Tea, 1906 (茶の本) 社会思想社、P103、1995
- 26) 品川高司：「印象の工学」とはなにか、丸善フラネット(憐)、P230、2000.01
- 27) 神宮英夫：印象測定の心理学、川島書房、P46、1996.4
- 28) (社)日本建築学会：よりよい環境創造のための環境心理調査手法入門、技報堂出版(憐)、P23、2000.5
- 29) 南風原朝和：心理統計学の基礎、有斐閣、P319、2002.6

第4章

- 1) (社)日本建築学会：よりよい環境創造のための環境心理調査手法入門、技報堂出版(憐)、2000.5
- 2) 讚井純一郎、乾正雄：レパートリー・グリッド発展手法による住環境評価構造の抽出、日本建築学会計画系論文報告集、P15-21、第367号、1986.9
- 3) 讚井純一郎、乾正雄：個人差及び階層性を考慮した住環境評価構造のモデル化、日本建築学会計画系論文報告集、P54-60、第374号、1987.4
- 4) 槇究、乾正雄、中村芳樹：評価項目が街路景観評価に及ぼす影響、日本建築学会計画系論文報告集、P27-33、第468号、1995.2

- 5) 槇究, 乾正雄, 中村芳樹: 街路景観評価の個人差について, 日本建築学会計画系論文集, P55-62, 第486号, 1996.5
- 6) ション・ラング: 高橋鷹志監訳: 建築理論の創造, 鹿島出版会, 1999.3
- 7) 宇治川正人, 丸山玄, 讚井純一郎: 電子メールを用いた評価グリッド法の開発, 日本建築学会計画系論文集, P75-80, 第518号, 1999.4
- 8) 讚井純一郎, 乾正雄: 住環境評価構造の抽出手法に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, P307-308, 1983.9
- 9) Naoyuki Oi: The Difference among Generations in Evaluating Interior Lighting Environment, Journal of Physiological Anthropology and Applied Human Science, 24:87-91, 2005

第5章

- 1) 真鶴町: 真鶴町まちづくり条例 美の基準, 1998.5
- 2) 五十嵐敬喜, 野口和雄, 池上修一: 美の条例-いきづく町をつくる, 学芸出版社, 2002.11
- 3) プリンズ・オブ・ウエールズ: 出口保夫訳: 英国の未来像, 東京書籍, P76, 1991.2
- 4) クリストファー・アレクザンダー: 平田翰那訳: パタン・ランゲージ, 鹿島出版会, Px, Pxi, P624, 2005.5